

2014 習志野市青少年海外派遣事業

高校生は言葉だけでなくとも交流ができる

習志野市立習志野高等学校（国際交流担当教諭）石渡 聖子

2 週間はあっというまの時間ですが、その時間がどれだけ高校生の将来に影響を与える時間であったかは計り知れないのではないのでしょうか。

成田空港で保護者の方の温かい見送りを受け、高校生 20 名はタスカルーサ市へと旅立ちました。タスカルーサ市に到着すると、アメリカ南部の人々の温かいサザンホスピタリティーに迎えられました。

タスカルーサ市到着後はすぐに週末。週末は完全にホストファミリーと一緒に過ごすことになっていましたので、今回同行の日本人高校生とは接点がありません。ジェミソンマンションからホストファミリーに迎えられ、それぞれの世帯へと向かっていくときの笑顔は、私にはどこかぎこちなさを感じ、心配がないと言えようそになりました。ところが週明けの生徒一人一人に会った時の笑顔のすがしさは、本当にサザンホスピタリティーに抱かれ、家族の一員になりつつあるのではと感じられました。

今回は習志野・タスカルーサ両市の人々と交流することがメインですので、習志野市の高校生はそのサザンホスピタリティーを持ったホストファミリー・高校生と積極的に交流を持ちました。

平日は現地高校との交流を中心とし、他に近隣への遠足などを行いました。このとき、6 月に日本を訪問したタスカルーサ市の高校生がまだ夏休みであるということで、同行して

くれました。私は、日本で出会った以上の親密さを見て取ることができ、「日本アメリカ両国の懸け橋となっているな」と温かい気持ちになったものです。ホストファミリーの方が庭にプールを持っているということで、プールパーティというのを行いました。みんな大はしゃぎです。その様子を見てみると国境は関係なく、高校生は言葉だけでなくとも交流ができることはたくさんあるのだと実感しました。

これだけ充実した日々を送りましたので、帰国前日のフェアウェルパーティーでは多くの生徒がホストファミリーへの謝辞を述べながら涙し、“I love Tuscaloosa!” “I don’t want to leave Tuscaloosa.” といった言葉が多く聞こえてきたのです。これは現地の方もとても喜んでくれ、今回の習志野市からの高校生を迎えてよかったと感想を述べてくれました。タスカルーサ市を去る日も、ホストファミリー、タスカルーサ市の高校生との別れを惜しむ習志野市の高校生はなかなかバスに乗ろうとせず、どれだけ顔をくしゃくしゃにしたことか。

生徒は帰国前にお世話になった方々に Thank you Letter を書き、手渡してきました。一体なんと書いていたのでしょうか？ “Keep in touch!” でしょうか？ 何人の生徒が将来再びタスカルーサ市を訪問するか、または日本にタスカルーサ市の友だちを呼び入れるのか。今後も交流は続いていくはずです。